



平成25年5月20日

## 卓話 『世界を歩く禅』

曹洞宗瑞雲寺閑栖／曹洞宗准師家

平野 克史 様

今日は海外での座禅のお話をいたします。永平寺には海外から禅に関心のある人が多く来ますので、昭和61年に国際部を作り携わらせていただきました。アメリカのワシントン大学の夏期講座には10年間座禅の指導にまいりましたし、パリのソルボンヌ大学でも講演と座禅の会を開き、今でも続いています。またウィーンでは侯爵一族が住む山城でセミナーがあり、3年ほど座禅に通いましたが、その縁でエクアドルに座禅に行く縁ができ、いまだに参っております。

座禅は私どもは仏座と言います。お釈迦様が菩提樹のもとでお座りになった姿がそのまま私どもの座禅です。座るときは50年の経験があるお坊さんも初めて座った人も、全部仏であるという教えです。

海外の方からよく受ける質問の一つに、座禅はなんですかという質問があります。それは人が人として正しくあるべき姿、形をあらわしたものである。禅は思想、信条、宗教、国境を超えたところにある。カトリックの神父さんたちも熱心に座りますが、座禅をすることでキリストの祈りが一段と深まるということです。

先だってアメリカのタコマ市のマックニール島へ座禅に行く機会を得ました。小さな船で行く刑務所の島で、アメリカでは座禅に熱心な人が多く、そういう人がその刑務所にいたわけです。14、5人ぐらい集まって座り方の説明からしたのですが、座っている姿を見ると、一所懸命という気持ちが伝わってきます。終わった後、何か話をということになり、私は、どうして彼らがここに来ることになっ

たんだらうという思いが一杯で、それを実感としてそのままお話ししました。世間では刑務所を出ると、まじめにしても、あの人は刑務所に入っていたんだよという噂でまた繰り返り返しになってしまう。世

間の目は厳しいけれども、あなた方のお父さんお母さんは、お釈迦様の教えにあるように、子供が食べたいと言えば自分が食べなくても子どものために、寒いと言えば自分が着ているものを脱いでも子どものために、そういうことなんだと。だからまずここを出たら両親に謝りなさい。そして立派な社会人になってほしいと訴えたわけです。帰るとき、一人の青年が私の荷物を持って送ってくれました。これも破格なことなのですが、網の囲いのところまで来て、網をつかんで無言で、ありがとう、さようならという感じ。今でもその様子がまぶたに浮かんでまいります。舟に乗るとき、思わず刑務所を振り返り手を合わせました。涙があふれました。あそこで今、私と座禅をした青年たちは囚人ではなく生きた仏であった。そう納得して帰ってまいりました。真実の心には国境がないということ、体を通して味わったわけでございます。

座禅は呼吸です。難しいことはない。どこでもできます。電車に乗ったときにも座ったら背筋を伸ばして呼吸を整える。これが大事です。そういう道を行えますよう願っております。ご無礼しました。

